

法宝撰『一乘仏性究竟論』の基底

——特に浄影寺慧遠の思想と対比して——

小野 嶋 祥 雄

問題の所在

『一乗仏性究竟論』六卷は、初唐期の仏教者である法宝（六二七—七〇三、七〇六年頃）が、一乗真実説の立場から玄奘三蔵とその門下が主張する三乗真実説を批判した著作である。本書は一九八六年に卷一・二・四・五が石山寺から検出されて研究が進められてきたが、未だ検討すべき課題が幾つか残されている⁽¹⁾。

その一つが、『究竟論』の教学の基底が奈辺にあるかという問題である。この問題を考える上で参考になるのが、著者法宝の伝記である。その唯一の伝記資料である賛寧撰『宋高僧伝』には「三蔵奘師学法之神足」と記されている⁽²⁾。しかしながら、法宝は玄奘とその門下の三乗真実説を批判したことからも、法宝が玄奘の教学を基底としているとは考え難い。そこで先行研究では『究竟論』自体を検討し、法宝の五時教判が『涅槃經』を最高位に置くことから「涅槃論師」とする

説や、一乗思想と三乗思想の教証を挙げる『究竟論』卷二「列經通義章第五」に、円測撰『解深密經疏』の影響が見られ、『究竟論』に真諦訳への依拠が見られることに依って「真諦系一乗家」とする説が提示されているが、本論文ではこの問題に對して、『究竟論』に浄影寺慧遠（五二三—五九二年）の著作との一致が見られることを指摘し、『究竟論』の教学の基底に浄影寺慧遠の教学が存在することを指摘したい。

一 『究竟論』に見られる北地仏教の学風

『究竟論』自体を検討してみると、『究竟論』には随所に北地仏教の学風が見られる。その一例として、『究竟論』では、經典だけでなく論書も教判の対象とすることが挙げられる。

・法宝撰『究竟論』卷一「權實義例章第四」

問フ。若シ爾ラハ、何カ故ニ諸ノ大論師ノ皆ナ立ツルコトニ乘五性^ヲ一如^ニクタルヤ。瑜伽等^ノ。答フ。諸論ノ立ツルコト義^ヲ、各授^ケニ教時^ヲ、随^フニ經ノ權實^ニ。《中略》世親菩薩ハ依^テ其ノ教時ニ造^ルニ五種ノ論^ヲ義^ニ各有^レ異リ。依^テ初時ノ教^ニ

造^リ俱舍論^ヲ說^ク三乘ノ実滅^ヲ。依^テ第二時ノ教^ニ造^リ般若論^ヲ說^ク諸法皆空^ヲ。依^テ第三時ノ教^ニ造^リ唯識等^ヲ說^ク依他ノ有等^ヲ。依^テ第四時ノ教^ニ造^リ法花論^ヲ說^ク二乘無滅^ト定性声聞^ニ菩薩与^ヘ記^ヲ方便^{シテ}令^ニ發心^セ。依^テ大乘經ノ仏性ノ義理^ニ造^リ仏性論^ヲ。依^テ第五時ノ教^ニ說^ク一闡提^ヲ有性^{トスルヲ}為^レ了^ト無性^{トスルヲ}不^レ了^トナスト。

〔龍大論集〕九一頁356—364

『究竟論』では、世親菩薩は第一時の教えに依拠して『俱舍論』を、第二時『金剛般若經論』、第三時『唯識論』、第四時『法華論』、第五時によって『仏性論』を作成したとして、世親が著した論書の撰述順序を、自身が主張する五時教判に当てはめて考えている。

『究竟論』のように論書を教判の対象とすることは、北地の地論学派の教判に見られる。⁽⁵⁾一例を挙げれば、智顗説灌頂記の『法華玄義』卷十上に南三北七の教判を紹介する中、その第六に地論学派南道派の祖慧光（四六八—五三七）の教判として、因縁宗・仮名宗・誑相宗・常宗の四宗判を紹介するが、この慧光の四宗判は論書も対象とした教判となっている。⁽⁶⁾

二 仏性の定義について

『究竟論』と浄影寺慧遠の著作には、仏性の定義に関して一致が見られる。

・法宝撰『究竟論』卷三「仏性同異章第七」

第一義空^ヲ名^テ為^ス二智慧^ト者、同^ニ密嚴經^ニ如来清浄藏^モ亦^タ名^ク無

法宝撰『一乘仏性究竟論』の基底（小野嶋）

垢智^ト。華嚴經ノ、無相智、無礙智ハ、具足^{シテ}在^リ於衆生ノ身中^ニ。如来藏經ノ、如来ノ徳相。起信論^ニ云フ、真如ノ自体相^トハ者、乃至、從^レ本已来^タ、性^ト自^ラ滿^ス足^ス一切功德^ヲ。所謂、自体^ニ有^ル大智^ヲ。慧光明ノ義^ハ故^{ナリ}。遍照法界ノ義^{ナルカ}故^ニ。乃至、具^ス恒沙ノ仏法^ヲ等^{ナリ}。

〔新正統蔵〕卷五五・四九三下—四九四上

・慧遠撰『涅槃經義記』卷八

三^ニ就^レ体^ニ說^ク。此之仏性ハ雖^モ名^テ為^ス二空^ト、体^ハ是^レ真心^{ナリ}。心^ハ是^レ覺性^{ナルカ}故^ニ名^ク智慧^ト。故^ニ華嚴^ニ云ハク、一切衆生ノ心ノ微塵^ノ中^ニ有^リ二無師智、無礙智、廣大智等^ヲ。馬鳴論^ノ中^ニ說^{キテ}為^ス本覺^ト。問^テ曰^{ハク}。凡^ハ時^ハ未^レ有^ラ二智解^ヲ。以^テ何^ノ義^ヲ故^ニ得^シ名^テ為^ス覺^ト。論^ニ自^{カラ}釈^{シテ}言^{ハク}。從^レ本已来^タ有^ル二大智慧光明ノ義^ハ故^ニ。遍照一切法界ノ義^{ナルカ}故^ニ。自性清浄識知義^ノ故^ニ名^テ之^ヲ為^ス覺^ト。是^レ義云何^ン。真心^ノ体^ノ中^ニ具^ス過恒沙ノ一切仏法^ヲ。心^ハ於^テ彼^ノ法^ニ同^{シク}体^ト照^シ明^ラ。由^ニ来^{シテ}無障^ニ名^ク照法界^ト。故^ニ名^ク智慧^ト。

〔大正蔵〕卷三七・八二四上

『究竟論』と『涅槃經義記』には、仏性^ニ第一義空^ニ智慧^ニということが説かれており、両書はその教証として『華嚴經』『如来藏經』『密嚴經』『起信論』を共通して引用している。『涅槃經義記』に引用されない『密嚴經』については、慧遠の時代には未翻訳であり、『如来藏經』については、慧遠撰『大乘義章』卷一「仏性義」の記述をも『究竟論』が参照していたと考えられる。

・慧遠撰『大乘義章』卷一「仏性義」

四^ニ対^{シテ}果^ニ分^ツ二^ニ。一^ニ法^ハ仏性^ニ、二^ニ報^ハ仏性^ニ。（中略）如^シ勝鬘^ニ說^クカ、如来藏^ノ中^ニ具^ス過恒沙ノ一切仏法^ヲ。如来藏經^ニ說^ク、衆生ノ

法寶撰『一乘仏性究竟論』の基底（小野嶋）

中ニ具足スト如来ノ一切種ノ徳ヲ。馬鳴論ニ説ク、從レ本以來具足スト一切ノ性功德ノ法ヲ。華嚴經ニ説ク、一切衆生ノ心ノ微塵ノ中ニ具スト無師智、無礙智、廣大智等ヲ。当レ知ル、皆ニ是レ法仏之性ナリト。

（『大正蔵』卷四四・四七三上）

法寶と慧遠は仏性を心識（阿頼耶識）と捉えることも一致しており、仏性の定義に共通する面が見られる。

三 三因仏性と仏身の対配について

『究竟論』と慧遠の著作の間には、仏性の定義の他にも、三因仏性と仏身の対配に於いて一致が見られる。

・法寶撰『究竟論』卷三「仏性同異章第七」

二事ノ因性有レ二。一ニハ正因、二ニハ縁因ナリ。二十八師子吼ニ云ハク、如キハ仏ノ所説ノ、有レ二種ノ因。正因縁因。衆生ノ仏性ハ為レサシ何レヲト。善男子、衆生ノ仏性亦タ二種ノ因アリ。一ニハ者正因、二ニハ者縁因。正トハ者謂レ衆生ヲ、縁因トハ者謂レ六波羅密ヲ。此レ説ク報仏ノ正因也。又云ハク、如キハ世人ノ言フカ有レラハ乳有レラ酪者、以テノ定得レ故ナリ。是ノ故ニ名ク有レラ乳有レラ酪。仏性亦タ爾リ。有レラ衆生ノ仏性アリ。以テノ当レ見レ故ニ。准スルニ此等ノ文、衆生ハ如ク乳ヲ為シ酪ノ正因ト、六度ハ如ク煖ヲ為シ酪ノ縁因ト。或ハ説テ中道ノ観智ヲ以テ為シ仏性ト、或ハ説テ善ノ五陰ヲ以テ為シ仏性ト、或ハ説テ無明ノ結等ヲ以テ為シ仏性ト。若シ具ニ説カハ一切ノ因性ヲ、如シ三十六ニ云フカ、夫レ仏性トハ者、不レ名ケ一法ニ、不レ名ケ十法ニ、不レ名ケ百法ニ、不レ名ケ千法ニ、不レ名ケ万法ニ。未レ得レ阿耨菩提ヲ、一切ノ善不善無記ノ法ヲ悉ク名ク仏性ト。如来ハ、或時ハ因ノ中ニ説レ果ヲ。此レ与レ三報仏ノ為レ縁正二因ト、亦タ

与レ法仏ノ為レ了因ト、亦タ証得レ縁因トナル也。

（『新正統蔵』卷五五・四九四上）

・慧遠『大乘義章』卷十九「三仏義」

次ニ第四門ニ、辨ニ定其ノ因ヲ。先ニ就テ法報ニ而辨シ其ノ因ヲ、後ニ就テ應ニ説ク。法報ノ因ノ中、兩ツナガラ同シク分別ス。一ニハ生了ノ分別、二ニハ縁正ノ分別ナリ。生了トハ如何シ。辨ニ無令ムト有ナラ、名之ヲ為レ生ト。已有令ムル現セ、説テ之ヲ為レ了ト。相ニ麁分スレハ、報仏ハ一向ニ生因ノ所生ナリ、以テノ本無ラ故ニ。法仏ハ一向ニ了因ノ所顯ナリ、以テノ本有ラ故ニ。於レ中ニ細ニ論スレハ、報仏ニ具足スルコトヲ二種ノ因ニ顯ス。一ニハ生因ノ生、二ニハ了因ノ顯ナリ。親シク起スレラ者、名之ヲ為レ生因ト、疎ニ助クルレラ者、説テ了因ト。〈中略〉以テスラ准驗スルカ故ニ知ス、報仏ニ有レ生有レ了、法仏ハ唯タ從テ了因ニ所レシテ得レ、非ニ生因ノ生ニ。以テノ本有ラ故ナリ。

（『大正蔵』卷四四・八四三中）

『究竟論』では、縁因と正因が報身仏の因、了因が法身仏の因となることが説かれ、『大乘義章』では、報身は生因（正因と縁因）の所生であり、法身は了因の所顯であると説かれており、『究竟論』と『大乘義章』では三因仏性と三身の対配に一致が見られる。

結語

これまでの検討結果を纏めると、以下の通りである。

『究竟論』には全体的に北地仏教の学風が見られ、また、『究竟論』卷三「仏性同異章第八」に説かれる仏性の定義と、三因仏性と仏身の対配については、浄影寺慧遠からの影響が見

られる。法宝が慧遠の著作を指南とすることは、法宝の『大般涅槃經疏』に「遠云」と慧遠の『涅槃經義記』を引用し指南書としていることが指摘されていることから、⁽⁷⁾『究竟論』に於いても同様に慧遠の著作を自身の主張の拠り所としたのであると考えられる。

なお、『究竟論』は、『究竟論』に先行して論難往復があった靈潤・義榮と神泰の権実論争の中、三乗を主張した神泰の批判から、一乗を主張した靈潤の義を救うという撰述目的があったと考えられるが、⁽⁸⁾靈潤は慧遠の孫弟子に当たることから、慧遠→靈潤→法宝という思想的系譜が想定され、右の結論を裏付けることが可能である。

- 1 浅田正博「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」(『龍谷大学論集』四二九号、一九八六年)、同「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」(『仏教文化研究所紀要』二五集、一九八六年) 参照。
- 2 賛寧撰『宋高僧伝』巻四・義解篇第二之一「唐京兆大慈恩寺法宝伝(勝莊)」(『大正蔵』巻五十・七二七上—中)。
- 3 布施浩岳『涅槃宗の研究 後篇』(叢文閣、一九四二年) 参照。
- 4 根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代背景」(『叡山学院研究紀要』第九号、一九八六年) 参照。
- 5 船山徹「地論宗と南朝教学」(『荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』、二〇〇〇年、法蔵館』一四九頁参照)。
- 6 智顗説灌頂記『法華玄義』巻十上(『大正蔵』巻三三・八〇一中)。

法宝撰『一乗仏性究竟論』の基底(小野嶋)

- 7 木村宣彰「法宝における涅槃經解釈の特質」(『大谷学報』五八巻一号、一九七八年) 参照。
- 8 『究竟論』と靈潤・義榮と神泰の論争の關係については、拙稿「初唐期における三一権実論の再検討」(『龍谷大学仏教学研究』第十五号、二〇一〇年) 参照。

〈キーワード〉 法宝、淨影寺慧遠、『一乗仏性究竟論』

(龍谷大学大学院研究生)